

14 生きることは芸術なり、
碧南に生まれた孤高の芸術家

藤井 達吉
(1881～1964／棚尾)



1 針吉、凧吉と呼ばれた少年時代

藤井達吉は、明治14年(1881)6月6日、碧海郡棚尾村字源氏(現 碧南市源氏町)に米屋、藤井忠三郎の三男として生まれた。学校は妙福寺(毘沙門さん)にあり、達吉は勉強もよくしたが、腕白で腕っ節が強く勇ましい少年であった。図画・工作が好きで、着物を縫い上げる程の腕前で、凧に描いた絵もうまかった。

2 七宝店に就職

小学校を卒業すると、11歳で知多郡の木綿問屋に丁稚奉公に出た。その後兄の雑貨商を手伝ったりした。芸術への志が芽生え「美術学校に行きたい」と親に頼んだ。父に反対されたが、母は達吉の才能を考え、名古屋の服部七宝店に就職させた。

3 芸術家へのふくらむ決意

明治37年(1904)、達吉は米国セントルイス万国博に七宝焼き出品のため渡米した。ボストン美術館にも出かけ、美術におけるデッサンの重要性を知った。

帰国した24歳の達吉はすぐに上京し、兄と七宝の事業をやったが失敗、兄は失踪、父の商売もうまくいかず、親子6人と2人の姪との貧しい東京生活を始めた。自然や世の中の全てが学校であり、先生であると考え、幅広い勉強をした。達吉は、高村光太郎が出した美術店に、与謝野鉄幹・晶子の短冊と共に出品した。作品も少しずつ売れ出したが、貧乏な生活はしばらく続いた。

4 中央美術界で存在をあらわす

達吉の作品を気に入ったという一人の紳士(岸田劉生や富本謙吉のパトロンであった芝川照吉)が家を訪れ、金一封を置いていった。このように達吉の美を深く求める純粋な気持ちや才能が徐々に認められるようになっていった。一流の芸術家との交流をはじめ、銅版画家のバーナード・リーチに学んだり、陶芸も学び出した。

大正元年(1912)、美術集団「ヒュウザン会」や「国民美術協会」が創立されたときには、ただ一人の工芸家として参加したりした。大正8年(1919)38歳のとき、「装飾美術家協会」を作ったり、日本美術院に出品して入選し、院友になった。

5 純粋な芸術家としての新たな道を選択

大正7年(1918)、達吉は仲間と共に「文展」の中に工芸部門を入れるように働きかけた。翌年「帝展」と改称されたが、すぐには達吉の願いは入れられなかった。このとき、達吉への中傷や攻撃がなされた。傷ついた達吉は、この運動から一切手を引き、だれからも縛られない自由な総合芸術家への道を選んだ。

6 日本のデザイン革命の先鋒者

大正半ばからは、芸術を生活に結びつけるために啓発的な活動を始めた。家庭工

芸の制作法を「主婦の友」に紹介したり、講師を行ったりした。また、白木屋百貨店図案部の顧問として、商品デザインをした。そして昭和4年(1929)48歳のときから12年間帝国美術学校(現 武蔵野美術大学)の図案工芸科の教授を務めた。

7 瀬戸の陶芸家に大きな影響

昭和2年(1927)、46歳のとき瀬戸に滞在した。達吉は、「自分で文様は写生しなさい」「ロクロは自分でひけ」「窯は自分で焼け」と強く指導した。芸術としての陶芸を教えたのだ。その教えは、鈴木八郎や栗木伎茶夫(ぎさお)などの優秀な陶芸家を生み出した。「物は永遠の力なり」という信念を持ち、一流や本物を求めた。

8 強い郷土愛

大正15年(1926)、碧南国民学校(現 碧南高等学校)に窯業科を新設し、郷土工芸を興そうとした。しかし、猛反対にあい、故郷に失望する。ただ、そんな故郷でも棚尾の平岩幸左衛門の恩に報いようと、寿像を建てようとした弟子達に感動したり、昭和8年(1933)、不慮の火災にあった母校棚尾小学校の新校舎完成に際して作品を贈ったりした。古里に失望を繰り返すも、郷土を愛する気持ちは持ち続けた。

9 小原で優秀な和紙工芸作家を育てる

昭和10年(1935)、達吉は東京大井町から神奈川県真鶴に転居した。その頃から永井賓水主宰の俳誌「アヲミ」に随筆や表紙絵を投稿した。また、和紙色紙を皇太后が買われたり、内親王のご成婚のお祝い品として、六曲一双の屏風を献上した。

昭和20年(1945)、太平洋戦争の成り行きが悪化し、陸軍参謀総長の杉山元帥の進言もあり、小原村に疎開した。そこでは若い村人たちに和紙に付加価値をつけた和紙工芸を教えた。鳥屋平(とやがひら)に住み、「小原総合芸術研究会」を作ったり、「小原農村美術館」を造ったりした。加納俊治や山内一生など多くの著名な和紙工芸作家を育てた。人間教育を厳しく指導し、礼儀正しく律儀で情に厚かった。

10 ふるさと再び、道場山の生活

69歳になった達吉は体を壊し、棚尾の長田秀吉らの勧めで新川の道場山に移った。旧知や地元の人達とも気軽に接した。この期にあっても制作意欲や未来を予見する鋭い見識(拝金主義、物質文明や大量消費社会への憂いなど)はさえていた。しかし、碧南に美術館を造り、自分の作品を寄贈する夢は遂げられなかった。

昭和31年(1956)、5年少々の古里での生活にも、「古里の六とせの旅も夢とすぎ老いはらからは何処へ行くらむ」と詠み、老いてなお、流浪の旅に出た。

11 旅の一生

達吉は、四国遍路に度々出かけた。道場山を去り、沼津、岡崎市岩津、湯河原、岡崎戸崎町と、転々と住まいを変えた。達吉の一生を象徴しているような晩年であった。また、独身を通し、芸術一筋の人生でもあった。

昭和39年(1964)、岡崎市民病院にて故郷で育った鶏頭の花を眺めながら83歳で亡くなった。生涯古里を忘れず、自然を愛した達吉のふさわしい最期であった。

◆もっと知りたいなら

- ・『藤井達吉物語』
(平18市史料別巻3 浅井久夫)
- ・『藤井達吉先生』(昭50 中根仙吉)
- ・『藤井達吉の生涯』(昭49 山田光春)
- ・『旅人われは 小説・藤井達吉』
(昭60 桑原恭子)

※その他多数有り